

ことばから始める音楽授業Ⅰ
 ～題材「にほんごは おんがくのすてきなおかあさん
 (小学校1年生)」の実践から～

The Music Curriculum in School Based on The Musicality
 in The Japanese Language Ⅰ
 : From The Case of 1 st Grade in The Elementary School

伊 野 義 博

Yohihiro INO

はじめに

音楽科教育においては、日本の伝統性にもとづいた音楽学習の必要性が指摘されている。このことが真に実現されるためには、ただ単に「わらべうた」や「民謡」を教材として扱うといった発想では不十分であろう。「日本」に生きる子どもの現状と音楽性を捉えた上で、最善のプログラムを考案していかなければならない。

そのためには、日本の子どもがどのように音楽的であるか（あるいは音楽的でありつづけてきたか）、ということを今一度子どもの現実から見つめ直す必要があるだろう。学校における音楽教育は、そうした事実を踏まえた上でなされるべきだと考える。

筆者が考える子どもの事実とは、日本語を母国語とし、日本の風土の中で生きているという当たり前の現象である。日本語で話し、行動し、表現する子どもの身体には、すでに豊かな音楽性が内包されている。というのも、言葉や言葉を用いて表現する行為そのものが、すでに音楽的な側面を多く持っているからである。このことは、日本の伝統音楽が声の音楽を中心としたものであり、言葉と密接に関わって生成されてきたこととも深く関係してくる。

本稿はこうした考えのもとで、小学校低学年に焦点を当てた授業を紹介するものである。特に低学年に目を向けているのは、義務教育の最初の段階でどのような形で伝統性に立ち向かわせるかといった理論と実践の統合的な研究が、過去のわらべうたの実践以降見られないからである。

内容としてはまず、言葉と音楽との関連を捉える。ここでは、言葉の持つ音楽的な側面や言葉と音楽との関係、そして、音楽を創出する言葉の力について考察する。その後、言葉の持つ音楽性に注目した教材収集の視点と具体的な教材例を紹介し、授業を構成していく。

本授業は、平成15年6月5日、新潟大学教育人間科学部附属長岡小学校1年1組において筆者により実践された。本稿は、その際参会者に資料として配付された原稿をもとにしている。こうした性格上、本文はいわゆる「ですます」調で語りかけるように書かれていることを了承されたい。全体の構成は、以下のようになっている。

Ⅰ ことばと音楽

1 ことばの持つ音楽的な側面

- 2 ことばで表現する音楽
- 3 歌を生み出すことばの力
- 4 歌の創出
- II 教材収集の視点と教材開発
- III 活動の枠組み
- IV 学習が期待される音楽的側面
- V 授業構成案
 - 1 どのような題材か
 - 2 なぜこのような題材か
 - 3 ねらいは何か
 - 4 どのような流れになるか、用いる教材は何か
 - 5 学習指導要領との関連はどうか
 - 6 評価規準をどのように設定するか
 - 7 授業の全体計画、そして評価の計画と方法は？
 - 8 実際の展開はどのようになるか

◎資料 紙芝居

I ことばと音楽

1 ことばの持つ音楽的な側面

例えば子どもが「おかあさん」ということばを発する時のことを考えてみましょう。

すでに「おかあさん」には、おかあさん といった高低のアクセントを感じ取ることができます。

おかあさんと呼ぶときの状況によって、いろいろな表現が生まれてきます。

近くにいるおかあさんに声をかける時は、おかあさん、あるいは「かあ」より「さん」の方がもっと高い音になることもあるでしょうか。

遠くにいるおかあさんと呼ぶ場合は、「おかあさ——ん」となったりします。

呼び手の感情によって、声の音色や発音の仕方も微妙に変化します。甘えるとき、しかられた時、切ない時…等々。

これらの表現には、音の高低、音色、発声、発音等の要素が含まれており、皆すでに音楽的です。

「おかあさん」という呼びかけに対して「なあに」という応答が生まれます。この時、子どもの発する「おかあさん」と、母親の答える「なあに」の間には、一呼吸を単位とした自然なリズムが形成されます。この会話のアンサンブルは、相互の気持ちと呼吸が合うことにより、いっそう確かなものとなります。また、呼びかける子どもの感情やその感情をどのように受け止めておかあさんが答えるかによって様々な表現が生まれてきます。

日本の子どもの音楽的表現の形式について藤田美美子氏は、「日本の子どもの「音楽表現の形式」の基礎的な単位は、一呼吸周期で発話される日本語のフレーズ、語、音節によって作り出される。その音響構造は、その行動が起こったときの子どもの表現意欲の強さ、呼吸の長さ、日本語の音構造を変数として決定される。」ことを明らかにすると同時に、この「音楽表現の形式」が「日本の子どもたちのパフォーマンスに一貫して認められる。」ことを指摘されています¹。

この事実は、学校における音楽教育を考える上できわめて重要なことに思われます。子どもの音楽表現の基本構造が、呼吸に支えられた日本語のフレーズ、語、音節によって成り立っているならば、その事実を根幹にすえた音楽教育がなされる必要があるでしょう。

ことばは、呼気と吸気のくり返しによる人間の呼吸によって外界に声として発せられますが、そこでは、日本語が自然に形成するリズムカルな様相がよくわかります。

わたくし 生まれも育ちも葛飾柴又です
 帝釈天で産湯をつかい 姓はくるま 名はとらじろう
 人よんでふうてんの寅とはっします

名画「男はつらいよ」では、寅さんがこのように自己紹介をします。この場合、「姓はくるま」○「名はとらじろう」といったそれぞれの語でフレーズが小さく区切られ、呼吸のたびに「間」が生じます。また、「姓は」「とらじろう」「ふうてん」といった箇所では音高が上がって強調され、渥美清の素敵な声に支えられていっそう豊かな表現を帯びてきます。

寅さんの名調子は、こうした日本語を発する時の言語的・身体的特性がいかに発揮されているのです。

このように、ことばは声に出して伝えられた時、内包されていた音楽的な躍動があふれ出てくるのです。すぐれた感性をもった先達が、すばらしいことばを生み出してきました。

どっどど どどうど どどうど どどう
 青いくるみも吹きとばせ
 すっばいかりんもふきとばせ
 どどど どどうど どどうど どどう （「風の又三郎」宮沢賢治）

歌舞伎の七五調のせりふは、七、五といったことばのまとまりにより、リズムカルな語調を生みだし、様式化された日本語の素晴らしさを味わうことができます。

弁天小僧菊之助：雪の下から山越に、まずここまでは落ちのびたが、
 忠 信 利 平：行く先つまる春の夜の、鐘も七つか六浦川（むつらがわ）、
 赤 星 十 三 郎：夜明けぬうちに飛石の、洲先（すさき）を放れ舟に乗り、
 南 郷 力 丸：故郷を跡に三浦から、岬の沖を乗り廻せば、
 日本駄右衛門：陸（くが）と違って浪の上、人目にかかる気遣いなし、
 （歌舞伎「青砥稿花紅彩画（あおとぞうしはなのにしきえ）- 白浪五人男＜稲瀬川勢揃いの場＞」より）

こうした例は、何も大人の世界に突然あらわれるわけではありません。子どもの世代と深く関わっているものであり、その関わりが様々な伝統芸能や音楽、文学に集約されてきたのです。

グッチッパーの パのグのチのパのグ
 ジャンケンポン （じゃんけんうた）

おちゃらか おちゃらか おちゃらかホイ
 おちゃらか かったよ（or まけたよ or あいこで）
 おちゃらかホイ （じゃんけんうた）

茶ちゃつぽ 茶つぽ
 茶つぽにゃ ふたがない
 そことって ふたにしよ （手遊びうた）

ワンワン、ピーチクパーチク、ドンドン、ガタガタ等々、日常的に話す日本語そのものがすでに拍感をもっているわけです。子どもが「おちゃらか？」を遊ぶ時、日本の伝統音楽の中に見られる、一拍連続の拍感や、表間、裏間といった感じ方を十分に楽しんでいることになります。

さて、ことばの持つ音楽的な側面は、子どもの感情、呼吸、遊びの様態などと絡み合いながら「ふし」となっています。

先ほどの「おかあさん」は、

おかーあさん
ソ ラ ソラ ○

友達を遊びに誘う時は、

たーかしくんVあーそびーましょV
ラ ソソ ラ ○ミ・ソラ・ソ ラ ○

などとなったりします。

今でも子どもがよくやる遊びに「だるまさんがころんだ」がありますが、ここでは鬼になった子の口からは、いろいろな「だるまさん」を聞くことができます。

1拍ずつ、単調に言うと、

だ る ま さ ん が こ ろ ん だ

となりますし、前後にことばを集めると、

だるまさんが—————ころんだ

などとなったりします。

また、歌にしてしまう子どももいます。例えば、

だーるまさんがこーろんだV
ラ ララララ ラ ソソラ○

まさに、先程の藤田氏の指摘の通り、「その行動が起こったときの子どもの表現意欲の強さ、呼吸の長さ」が変数となりいろいろな表現が生まれています。私たちにとって大切なのは、日本の子どもがこうしたすてきで豊富な表現方法をすでに自身の内に身体化していること、そしてそうした子どもたちに対峙しているという事実です。

2 ことばで表現する音楽

日本において、ことばをとめない音楽表現をすることはとても自然な行為でした。「唱歌（しょうが）」という用語があります。唱歌とは一般に日本の楽器の旋律またはリズムを口で唱えること²という意味に解され、楽器の教習や習得のために用いられています。例えば、太鼓のリズムを「テンツクテンテン」、箏の節を「テントンシャン」などと表現します。

有名な箏曲「六段の調」は「テーントーンシャン○」といった唱歌で始まりますが、ここには、旋律（節回し）やリズム、音色をはじめ、音楽表現上の細かな情報が総体として含まれています。こうした唱歌による表現は、日本の伝統音楽を習得する上では欠くことできないものですが、ここでは、日本語がその特性をいかに発揮し、音楽の世界を見事に表現しています。

このことは以下に示すわらべうた「あぶくたった」の例を見るまでもなく、日本語が豊富な擬音語や擬態語を持ち、それを母国語とする人々が、子どもの頃から日常的にその世界に浸っていることとも深く関係してくるものと思われます。

あぶくたった
あぶくたった にえたった
にえたかどうだかたべてみよう ムシャムシャムシャ
まだにえない

あぶくたった にえたった
にえたかどうだかたべてみよう ムシャムシャムシャ

もうにえた

とだなにしまつて ガチャガチャガチャ
おふろにはいつて チャプチャプチャプ
おふとんしいて でんきをけして
おやすみなさい

トントントン なんのおと かぜのおと ああよかった
トントントン なんのおと ○○のおと ああよかった
トントントン なんのおと ○○のおと ああよかった
トントントン おばけ (キャー)

3 歌を生み出すことばの力

「おかあさん」のところですでに触れましたが、日本語の持つ高低のアクセントは、それにもっとも適した音程関係に対応してきます。最も基本的なものは、ラとソといったように長2度の間隔をもったものです。ちなみに、子どもが1, 2, 3と数を数える時は、

いー チ にー イ さー ン しー イ ごー オ ～

ラ ソ○ ラ ソ○ ラ ソ○ ラ ソ○ ラ ソ○～

といった形の歌にしたりします。また、「ちゅうちゅうたこかいな」の場合、

ちゅうちゅうたーこかーいなV

ソ・ラシ・シラ・ソミ・ソラ○

となって、ミソラといった音階が使われたりします(音高は相対的なものです)。これらは、伝統的なわらべうたで用いられてきた音階です。このように、日本ではことばと歌は密接な関係を保ってきました。

さて、歌を作るといった場合、私たちは一般に「作曲」という行為を思い出します。しかし、日本において、特に民俗においては、ある歌や曲を作り出すということと、私たちが考えている作曲という概念とはずいぶん異なっていました。歌は、もともとあったものに何らかの変容を加えて作り替えていくのがもっとも基本的な方法でした。

これは、子どもの世界でも大人の世界でも同じですが、例えば、手遊びのじゃんけん歌「おてらのおしょうさん」の場合、私が良く知っているのは次のものです。

おてらのおしょうさんがかぼちゃのたねをまきました
めがでてふくらんで はながさいて ジャンケンポン

この後半部分「ふくらんで」以降は、次のようなたくさんの、でも少しずつ違った歌(ヴァリエーション)を見つけることができます。

- ・は一ながさいてひーらいて エッサカサーのジャンケンポン
- ・は一ながさいてひーらいて エッサカホイ
- ・は一ながさいたらかれちゃって にんぼうつかってそらとんで
テーレービーの一まーえーで チャンネルまわして ジャンケンポン
- ・は一ながさいて みになって ピストルパストル ぐんかんのってチョ
- ・は一ながさいて みがなって くるくるまわして ジャンケンポン

4 歌の創出(特に民俗において)

このように、わらべ歌に見られるたくさんのヴァリエーションは、日本の子どもがもともと歌をつくり出す豊

かな能力を持っていることを示しています。こうした能力は、大人世代に通じていき、人々は多くの「うた」を生み出してきました。無数に存在する民謡はその代表格です。民俗において、「うた」は、歌う人自らが作り、そして歌うといった行為の過程で次第に形づくられてきたのです。「もと」となる「うた」を、自身や集団の中に取り入れ、新たな自分（たち）の「うた」を生み出す作業の繰り返しです。

例えば、次の楽譜は、新潟市内野の盆踊り唄の歌い出しです。

歌い出し1：盆だてがね なすの皮の雑炊らいえー

歌い出し2：竹の切り口に しこたんこたんと なみなみたっぶり たまりし水はいえー

「歌い出し1」は、盆踊り唄の中で最もよく歌われるパターンですが、盆踊りは、歌い手の気分を自由に即興することがその醍醐味ですので、「歌い出し2」のように、たくさんの歌詞を入れ込んでしまうこともできます。ことばを拍に乗せ、附加していくことによる即興的な表現が見て取れます³。

新潟市内野盆踊り唄 歌い出し1

唄、採譜：伊野磯博



新潟市内野盆踊り唄 歌い出し2

唄、採譜：伊野磯博



民謡の成立について町田佳聲氏は、歌い手に作者という意識がなく、おもしろい節を個々別々に真似て仲間うちや共同体の中で修正され、やがては土地の民謡として成立していくものであることを指摘されています⁴。また、民謡の旋律認識について柿木吾朗氏は、有名な「刈干切唄」の比較分析を通して「日本の民謡では、旋律の各部分の構造式が同じであり、かつ特徴的なリズムも含めての旋律曲線がだいたい一致してさえいけば、細部の旋律運動（小節など）にかなりの相違があっても、一般には一つの旋律として認識され、きかれている」という事実を示しています⁵。西洋的な耳から言えば明らかに異なっている旋律を同一のものとして認め、次々に改編していく態度が、新たな様式を創り出してきました。日本では、まさにこのようにしてたくさんの歌が生まれてきたのです⁶。

この「うた」をつくり出す能力はしかし、現代ではいつのまにか消えようとしています。音楽科教育では、「すでにできあがった作品」の表現や鑑賞に重点がおかれ、創作の学習では、他と違ったオリジナリティのある曲を作ることこそが、個性として認められてきました。

昨今、日本の伝統性に根ざした音楽の学習が注目を浴びてきています。伝統的な楽器や音楽作品に目を向けることはもちろん大切ですが、例えばこのように「うた」がことばと深く関係しながら創出される道筋に光を当て、その様相を明らかにするとともに、確かな力として次世代に伝えることこそ音楽教育の重要な任務ではないかと考えます。伝統性に根ざした音楽を教えるということは、「見える部分（例えば楽曲や楽器そのもの）」に加えて、「見えない部分（例えば民俗が培ってきた音楽の感じ方や創出法）」を教えるということに他なりません。

II 教材収集の視点と教材開発

以上のような視点から、教材として適当なものを様々に考え探索しました。

○ 日常会話から

日常会話における音楽的な側面を意識的に取り上げます。

例えば、「○○さ？ん」「は？い」といったような呼びかけ・応答の場面では、呼びかける人と答える人との間には、呼吸を合わせ、話し言葉の音韻の習慣に従った音楽的な行為が認められます⁷。この場合、子どもは、日本語に特徴的な高低アクセントを生かしながら、一呼吸の中で音節のまとまりに従って、相手の呼びかけに呼応した応答を見事に行うことができます。授業において、先生と子どもの会話の中に、こうした状況を意識的に作りだし、会話から生まれる音楽的な側面を強化することは、きわめて意味のあることと考えます。

○ オノマトペから

日本語の持つ豊かなオノマトペの世界は、教材として魅力的です。「ドンドン」「ルンルン」「ヒラヒラ」「ワンワン」等々、声に出しただけで、リズムカルな音楽表現を可能にします。先述した、わらべ歌「あぶくたった」では、「ムシャムシャムシャ」「ガチャガチャガチャ」「チャプチャプチャプ」「トントントン」といったオノマトペが、自然なリズムを生みだし、楽しい音楽の世界を演出しています。

○ 物売りの声から

物売りの声は日本語の持つ特性を生かしながら、様々な音楽的側面を凝縮した表現です。例えば、「おせんにキャラメル」という売り声では、日本語の等拍の拍節感そのままに、「おせんに」（４拍）＋キャラメル（４拍）＝おせんにキャラメル（８拍）といった表現されます。

おせんにキャラメル

１ ２ ３ ４ ５ ６ ７ ８

これに「え？」が加わり、「え？、おせんにキャラメル」などと声にするといいそうまとまりがでてきます。

歌うことが強調された売り声もあります。例えば、納豆、いしやきいも、金魚、竿竹などの売り声が代表格です。

いーしやーきいもーV

たーけやーさおだけーV

ソ・ラシ・シララ ○

ミ・ソソーミラララー○

○ 日本語の韻律（特に五音と七音）から

短歌や俳句など、五音七音に代表される日本語の定型リズムは、語り物や歌い物から盆踊りの口説きの歌詞にいたるまで、日本の伝統音楽の旋律やリズムの形成に深くかかわっています。

七五調に代表されるようなことばのリズムを楽しむ活動も十分に味わわせたいものです。

○ わらべ歌から

ことばの持つ音楽的な側面が自然にしかもいかに発揮されたものとして、わらべ歌があります。今回は、次のようなわらべ歌を実際に用いました⁸。

・だるまさんがころんだ ・もぐらどんのおやどがね ・あんたがたどこさ

・はないちもんめ ・ずいずいずっころばし ・キューピーさん

・たけのこ一本おくれ ・ひらいたひらいた ・かくれんぼ ・さよならあんころもちまたきなこ⁹

・茶々つぼ ・さよなら三角 ・手つないで

○ 呼吸（息）や身体性から

わらべ歌で遊ぶ子どもの様子を思い浮かべればただちに理解できますが、子どもは、自らの身体の動きによって音楽を受け取り、一呼吸を単位として表現していきます。「手を打つ」「歩く」「身体を揺する」「唱える」といった活動を組織する中で、音楽性を高めていくことができるでしょう。また、呼吸（息）をもとにした表現は、子どもの会話や音楽表現のみならず日本の伝統音楽にまで共通に位置付けられます。それぞれの息の長さを基本とした表現の在り方は、個人の自由な表現様式を生み出してきただけでなく、互いの気配を感じ、息を合わせるといったように、日本におけるアンサンブルの基本をなしてきました。

○ 唱歌（しょうが）から

楽器の節や旋律、音色をことばにより表現する唱歌の発想や感覚も、そして唱歌そのものも教材として用いることができそうです。「ピーヒャラドンドン」とか「ドンドコドン」といった表現は、子どもの遊びの世界や絵本などにも見られます。

○ お話から

お話は、それを語るだけでそこにたちまちことばの持つ音楽性が立ち現れますが、今回は特に、日本語の持つ拍感（拍のまとまり、表間・裏間、一拍連続などの拍が生み出す特徴）や発音・語感のまとまり、語呂や言い回しの良さを含んだものを選択するようにします。例えば次のようなお話に注目しました。

＜おべんと すいと＞¹⁰

この作品は、わすれんぼのけんちゃんが、明日の遠足に持っていく「おべんとうとすいと」を忘れないように「おべんと すいと」と言いながら帰るのですが、帰り道のいろいろな出来事の中で、ことばがどんどん変わっていくものです。ことばは「おべんと すいと」のリズム型にのって「おせんべういろ」→「テテンとたいこ」→「ゴホンとしゃっくりこ」→「コロツとスツと」といったように変化します。

＜ちゃっくりがきいふ＞¹¹

このお話は、「お茶と栗と柿と麩」を売りに出た男が、金魚売りの「きんぎょーえ、きんぎょーっ」といった呼び声や豆腐売りの「とうふー、ごまあげ、がんもどきっ」の呼び声を聞いて、「お茶と栗と柿と麩」を短くまとめて言うことをひらめき、「ちゃっくりがきいふ」といいながら町を売り歩きます。するとそれをきいた子どもたちが「パッピ、プッペ、ポ」と後に続き、さらにチンドンやの「チャンチキチーン、ドドオーン」が加わり、賑やかに街を歩くことになります¹²。

＜ネズミ経＞¹³

地元の昔話に注目してみました。そこにも、楽しくゆかいな音楽性あふれたことばの世界が広がっています。

長岡市成願寺町の高野アサさんによって語られた「ネズミ経」では、お経を頼まれたにせのお坊さんが、困ってしまって、一匹のねずみの様子をネタに次のような適当なお経を読み上げます。

のぞいたそうろう のぞいたそうろう
 すくだまったそうろう すくだまったそうろう
 立ったそうろう 立ったそうろう
 ぶたそうろう ぶたそうろう
 そらきた またきた どこいきた やれきた

方言を交えたことばが、リズムカルに唱えられます。

＜いのいのどんとこっとりさん＞

今回の授業のために私が脚色したお話です。末尾資料に掲載しました。お話のもとになっているのは、私自身が祖母から聞いたものです。

山へ畑仕事にいった男が、お昼を食べて昼寝をしています。そこへ小鳥がやってきて、口の中に吸い込まれてしまいます。目覚めた男がお腹を見ると、おへそから小鳥の羽が出ており、そこを引っ張るとおかしい鳴き声が聞こえてきます。

ぴいー ふうー ごんげんだ
 もってえまいればスッポロピンのパチリンピーー

喜んだ男は、この声を村中の人々に聞かせて回ります。そして夜、夢を見るのですが、そこではお腹の中の小鳥がたくさん卵を産み、男の口から飛び出します。たくさんの赤ちゃん鳥の鳴き声が聞こえてきます。

ぴいー ふうー ごんげんだ スッポロスッポロスッポロリン
 ぴいー ふうー ごんげんだ プープープープープー—————
 ぴいー ふうー ピップップ プップップップパピペペー

そして、何と、これらの小鳥たちは眠っている日本中の子どものお腹の中にスリリ…。

Ⅲ 活動の枠組み

日本語を意識し、日本語の中にある音楽的側面を感じ取って表現することを中核とした授業を展開します。全3時間の授業の核となる活動を以下のように絞りました。

<呼びかけと応答>

「〇〇さん」といった呼びかけ、「はい」といった応答を基本とした活動です。日本語の抑揚、音高アクセント等を含めたことばのニュアンス、会話における即興性、呼吸を合わせたやりとりを重視します。呼びかけには、「〇〇さん」だけではなく、「元気ですか」「おはよう」「こんにちは」「あそぼう」など、いろいろ考えられます。これに対して「元気ですよ」「あとで」「いいよ」など、適当な児童の答えが期待されます。また、教師による呼びかけの方法も様々に考えられます。例えば、同じ「〇〇さん」でも、一呼吸を長くとって「〇〇さ——ん」ということもできます。あるいは、硬くことばを区切った表現や「ソラ」や「ミソラ」の音階を用いた節で呼びかけることもできます。それらの呼びかけに対応した児童の反応が期待されます。

なおこの際、教師との呼吸を合わせるために、ボールを用いてやりとりをいたします。これは、清水和氏の授業の方法を用いたものです¹⁴。ボールを投げる・受けとることを通して、相互に「間」を感じ、フレーズを整えアンサンブルが可能になるでしょう。

<わらべうたを中心とした音楽遊び>

すでに、この授業に入る前に伊藤純子先生によって、たくさんのわらべ歌が紹介されています。どれも児童が大好きなものですが、既習のわらべ歌を楽しみむとともに、以下のような新しいものを加えていきます。

さよなら三角
 さよなら三角 またきて四角
 四角はとうふ とうふは白い 白いはうさぎ うさぎははねる
 はねるはのみ のみは赤い 赤いはほうずき ほうずきは鳴る プーップーッ
 さよなら三角 またきて四角で またあした

手つないで
 手つないで 手つないで 〇〇行こっせ
 肩くんで 肩くんで 〇〇行こっせ¹⁵ (*〇〇には、行きたい場所を挿入します。)

<お話の中から生まれることばの音楽的側面を楽しむ活動>

「おべんと すいと」では、このことばから生まれるリズム型にのって「おせんべういろ」→「テテンとたいこ」→「ゴホンとしゃっくりこ」→「コロッとスツと」といった表現を楽しみます。また、「ちゃっくりがきいふ」では、「きんぎょーえ、きんぎょーっ」「とうふー、ごまあげ、がんもどきっ」の呼び声から発展させ、いろいろな物の売り声を作り出すことも可能です。児童がお店やさんになってみるのも一案です。

こうした学習を発展させ「いのいのどんとこっとりさん」では、児童のお腹に入っていた(と想定される)小鳥の鳴き声をそれぞれが作り出す活動へと発展させたいと考えています。お話によって児童の持つ「作り出す力」を引き出せたら成功です。

<ことばと音楽(楽器)との交信活動>

「おべんと すいと」に出てくる「テテンとたいこ」や「ちゃっくりがきいふ」に登場するチンドンやの「チャンキチチーン、ドドォーン」の流れから、こうしたオノマトペを利用して楽器の表現をする活動です。最初は、この「テテン」「チャンキチチーン、ドドォーン」をもとに鉦や太鼓を用いて表現し、次第にいろいろなリズムの表現に発展させます。児童が、作り出したものを楽器で演奏し、いわば楽器と会話させながら、多様な表現を生み出すことが期待されます。

こうした表現は、後年日本の伝統音楽における唱歌（しょうが）を用いた学習にも自然と結びついていくでしょう。

IV 学習が期待される音楽的側面

児童に期待される内容を音楽的側面に限定するならば、次のように整理されます。

○時間的な要素

- ・一呼吸でことばを表現することから生ずる時間間隔（感覚）（ex. だるまさんがころんだ）
- ・語りや会話、定型が生み出す時間間隔（感覚）（ex. 雪の下から山越に～）
- ・身体の動きに伴う拍の伸縮や軽重の変化（ex. ソーレ、ドッコイショ）
- ・個人の息に従った自由な伸びや伸縮（リズム）（ex. きんぎょ——えきんぎょ——）
- ・ことばのリズムが生み出す時間間隔（感覚）（ex. そらきた、またきた、どっこいきた、やれきた）
- ・等拍のリズム（ex. おてらのおしよさんが…）
- ・表間・裏間
- ・拍の軽重（ex. ドンドコドン）
- ・拍の伸縮（ex. セーノッ ヨイショ）
- ・漸次的変化（ex. ドーンドン ドン ドンドン ドンドン……）
- ・附加リズム（ex. あんたがたどこさ、ひごさ、ひごどこさ）
- ・リズム型（ex. 定型のリズムパターンやその組合せ）
- ・拍感（上記のような拍のそれぞれの特徴）
- ・間（ま）

○音色、発音、語呂合わせ的要素

- ・様々な音色、音色の変化（ex. チャンチキチン、ドドンコドン、or 個性的な声の音色、個人内の声の音色の変化）
- ・発音の違い、様々な発音の組合せ（ex. ムシャムシャガシャガシャ）
- ・語呂の組合せ（ex. ちゃっくりがきいふ）

○旋律的要素

- ・抑揚、高低アクセントの表現から生まれる節（フレーズ）（ex. おかあさん なあに）
- ・ことばのまとまりから生まれる節や節回し（フレーズ）
- ・フレーズ感（上記のようなフレーズのそれぞれの特徴）
- ・音階（ex. ソラ、ミソラ）
- ・相対的な音高
- ・音高の漸次的な移行

○構成的要素

- ・ことばの附加的な連結
- ・ことばの拍節内への挿入
- ・音節を生かした構成

○合わせる要素

- ・息、呼吸を合わせる
- ・間を感じて合わせる

○身体的な要素

- ・発音
- ・息（呼吸）のコントロールと音楽のつながり
- ・身体運動（遊びや動き）と音楽のつながり

V 授業構成案¹⁶

1 どのような題材か

「にほんごは おんがくのすてきなおかあさん」

日本語が持っている音楽的な側面を感じ取って、それらを生かした音楽表現を楽しみます。

2 なぜこのような題材か

日常的に日本語を用いて話し、考え、行動し、表現している児童の身体には、ことばの持つ特性が生かされた音楽性が内包されています。というのも、ことばやことばを用いて表現する行為そのものが、すでに音楽的な側面を多く持っているからです。この事実をしっかりと把握した音楽授業が必要だと考えます。

残念なことに、こうした子どもの持つ音楽性を、現在の日本の音楽教育が十分に汲み取っているとは思えません。むしろこれまでの学校の音楽教育は、子どもが自分の内に育んできて自然な音楽的成長を抑え、それとは異なった方法で新たな価値体系を教えてきたということもできます。もちろん、様々な価値体系を学習することは大切なことです。しかしながら、基本になるものは何なのかを考える必要があります。「ことば」に注目するのはこのためです。

また昨今、学習指導要領をはじめ、日本の伝統性に根ざした音楽を扱うことの重要性が指摘されていますが、このことは、箏曲や民謡、あるいは和太鼓をカリキュラムに取り入れるだけで解決する問題ではありません。問題は、日本の伝統音楽の「何」を押さえ、どのようなつながりを持って教えていくかといった点です。すなわち、日本の文化の中で育ってきた音楽を受け止め、自国の文化としての深い理解ができるためには、そのためのカリキュラムが小学校から一貫して存在する必要があります。そうしてはじめて、日本の伝統音楽を異文化ではなく、自文化と捉えることができるのです¹⁷。今回の1年生の授業は、そのための一歩と位置付けています。

日本では、ことばを出発点として古くから豊かな文化が醸成されてきました。音楽の場合もそうです。声明、謡曲、語り物、三味線音楽等々、伝統的な音楽の多くは、声の音楽が多いと言われていますが、これらは語ること、唱えること、謡うこと、唄うこと、詠うこと、謳うこと、といったように、ことばを核として花開いてきました。日常的な会話やわらべ歌、あるいは相撲の呼び出し、コマーシャルなどの中に、伝統的な音楽との共通点を見出すことは容易です。小学校のそれも1年生において、「ことばー音楽」を軸にした授業を具体的に提案する。これがもう一つの目的です。

「にほんごは おんがくのすてきなおかあさん」は、こうした背景から考え出されました。

授業では、ことばの持っている音楽的な側面を感じ取って、それらを生かした音楽表現を楽しみます。3時間の中でできることは、多くはありません。「ことばの持つ音楽的側面」とは、V章で示したように多岐にわたり、しかも総合的な性格を持つものですが、本授業においては、活動のそれぞれにおいて特に、拍、ことばが生み出すフレーズ、音色に重点をおいて進めます。

3 ねらいは何か

3時間の授業において、次の4点をねらいとします。

- ・ことばの持つ音楽的側面（拍、フレーズ、音色）に興味を持ち、意欲的に表現しようとする態度を養う。
- ・ことばの持つ音楽的側面（拍、フレーズ、音色）を感じ取り、それらを生かした表現の工夫をさせる。
- ・ことばの持つ音楽的側面（拍、フレーズ、音色）に気を付けて、声で表現する技能を伸ばす。
- ・ことばの持つ音楽的側面（拍、フレーズ、音色）に気を付けて聴くとともに、それぞれの気分を感じ取って聴くようにする。

4 どのような流れになるか、用いる教材は何か

3時間の流れを次のように計画しました。なお、教材についての詳細は、Ⅲ章をご覧ください。

内 容	活動の発展と教材 ()		
	1時間目 → →	→ → 2時間目 → →	→ → 3時間目 →
ボールを用いた呼びかけと応答 【ボールでおはなし1】 【ボールでおはなし2】	【ボールでおはなし1】 ・名前を呼んでボールを投げる教師に対してボールを投げ返ししながら声で答える。 （「〇〇さん」「はあい」といった形を基本とした応答表現）	【ボールでおはなし2】 ・様々な距離やボールのスピードに応じて応答をする。 （互いの距離感やスピードの違いによる声の応答表現、ソラ・ミソラなどの音階も交えた応答表現）	↓ ↓ ↓ ↓
わらべうた 【うたってあそぼう】	【うたってあそぼう】 → → → → → → → → → → ・わらべうたによる身体表現や歌遊びを楽しむ。 （・もぐらどんのおやどがね・ずいずいずっころばし・せっせっせのキューピーさん・たけのこ一本おくれ・ひらいたひらいた など既習の曲や・茶々つぼ・さよなら三角・手つないで、などの新曲） ↓		
お話とその展開 【いろんな声をたのしもう】 【もの売りさんになってみよう】 【楽器とおはなし】 【おなかにいるのはどんな小鳥さん？】	【いろんな声をたのしもう】 → → → → ・「ちゃっくりがきいふ」のお話を聞いて、ことばの表現を楽しむ。（「きんぎょえ、きんぎょえ」「とうふー、ごまあげ、がんもどき」「ちゃっくりがきいふ」「パッピ、プッペ、ポ」「チャンチキチーン、ドドォーン」） → →	【もの売りさんになってみよう】 → → → ・お話を展開させ、物売りになって、それぞれ声で表現する。 （様々なもの売りの声：「なっとなっとなー」「いーしやーきいもーやきいも」「たけやーさおだけー」「あまーい甘酒」「おせんにキャラメル」） → → → → →	【楽器とおはなし】 → → → → → ・お話を展開させ、「チャンチキチーン、ドドォーン」といった唱歌（しょうが）の発想を生かして、大太鼓、締め太鼓、鉦の唱歌を自分で作る。（「ドンドコ」「チャンチキ」「テテン」などの唱歌） ↓ 【おなかにいるのはどんな小鳥さん？】 → ・「いのいのどんとこっとりさん」を聞いて、もとの鳴き声を参考にしながら、自分の鳴き声を表現する。 （小鳥さんの鳴き声）

5 学習指導要領との関連はどうか

本授業は学習指導要領の指導事項の多くに関連していますが、直接的には以下の事項を考えています。
（下線筆者）

A 表現

(2) 楽曲の気分や音楽を特徴付けている要素を感じ取って、工夫して表現できるようにする。

イ 拍の流れやフレーズを感じ取って、演奏したり身体表現をしたりすること。

(3) 歌い方や楽器の演奏の仕方を身に付けるようにする。

ア 自分の歌声及び発音に気を付けて歌うこと。

(4) 音楽をつくって表現できるようにする。

リズム遊びやふし遊びなどを楽しみ、簡単なリズムをつくって表現すること。

B 鑑賞

(1) 音楽を聴いてそのよさや楽しさを感じ取るようにする。

イ リズム、旋律及び速さに気を付けて聴くこと。

ウ 楽器の音色に気を付けて聴くこと。

6 評価規準をどのように設定するか

学習指導要領の指導事項は上記のように、表現（歌唱、創作）と鑑賞に関連して考えられます。ここに対応する評価規準すなわち内容のまとまりごとの評価規準とその具体例は以下の通りです。下線は本授業の評価規準と特にかかわりの深い内容を示しています。なお、この評価規準は、国立教育政策研究所より報告のあった「評価規準の作成，評価方法の工夫改善のための参考資料－評価規準，評価方法等の研究開発－」（平成14年2月）がもととなっています。

	ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽的な感受や表現の工夫	ウ 表現の技能	エ 鑑賞の能力
歌唱	○	○	○	_____
器楽				_____
創作		○		_____
鑑賞			_____	○
内容のまとまりごとの評価規準	<p>【歌唱】歌唱表現に対する興味・関心をもとに、進んで歌唱表現を楽しむとともに、その経験を生活に生かそうとする。</p>	<p>【歌唱】斉唱や輪唱などによる歌唱表現及び歌声のよさや楽しさを感じ取るとともに、歌詞の表す情景や気持ちちを想像し、<u>拍の流れやフレーズ</u>などを感じ取り、それらを生かした歌唱表現を工夫したり、<u>身体表現</u>を工夫したりしている。</p> <p>【創作】様々なリズム、<u>いろいろな声や音の響きのおもしろさ</u>を感じ取るとともに、音楽表現のイメージをもち、それらを生かした音楽づくりを工夫している。</p>	<p>【歌唱】<u>範唱や範奏を聴いて</u>歌ったり、階名で模唱や暗唱をしたり、<u>リズム譜に</u>親しんだりしている。また、<u>自分の歌声及び発音に気を付けて</u>歌うとともに、互いの歌声や伴奏の響きを聴いて歌っている。</p>	<p>【鑑賞】<u>リズムや旋律及び速さ</u>、<u>楽器の音色や歌声</u>などに気を付けて聴くとともに、楽曲の気分を感じ取って聴く。</p>
評価規準の具体例	<p>【歌唱】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・斉唱や輪唱などの<u>歌唱表現に興味や関心</u>をもち、楽しく歌おうとしている。 ・歌に合わせて自ら体を動かし、楽しく歌唱表現をしている。 	<p>【歌唱】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歌詞の<u>もつリズムやことばの抑揚</u>などに気付いて表現を工夫している。 ・<u>拍の流れやフレーズ</u>、強拍や弱拍を感じ取って、歌い方や身体表現を工夫している。 <p>【創作】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・様々な<u>リズムや音そのもののおもしろさ</u>を生かした表現を工夫している。 	<p>【歌唱】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・範唱や範奏を注意深く聴き、<u>リズム</u>、<u>旋律</u>、<u>強弱</u>、<u>速度</u>などに気を付けて、よりよい表現をめざして歌っている。 ・<u>正しい発音</u>、<u>きれいな発音</u>、<u>はっきりとした発音</u>に気付くとともに、心を込めて歌詞を読んだり歌ったりしている。 	<p>【鑑賞】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>フレーズのまとまりを意識してリズム</u>を感じ取って聴く。 ・いろいろな楽器そのものに興味をもちたり、音楽を聴く中で、自然に聞こえてくる<u>楽器の音色</u>に気を付けたりして聴く。

これらを題材及び題材のねらいと再度照らし合わせ、次のように題材の評価規準と学習活動における具体の評価規準を設定しました。

	ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽的な感受や表現の工夫	ウ 表現の技能	エ 鑑賞の能力
題材の評価規準	ことばの持つ音楽的側面（拍感、フレーズ、音色）に興味を持ち、意欲的に表現しようとする。	ことばの持つ音楽的側面（拍、フレーズ、音色）を感じ取り、それらを生かした表現の工夫をする。	ことばの持つ音楽的側面（拍、フレーズ、音色）に気を付けて、声で表現している。	ことばの持つ音楽的側面（拍、フレーズ、音色）に気を付けて聴くとともに、それぞれの気分を感じ取って聴く。
学習活動における具体の評価規準	①ボールの応答やわらべうたによる遊びを楽しんでいる。（歌唱） ②お話に関心をもち、楽しみながらもの売りや唱歌（しょうが）などの表現をしようとしている。（歌唱）	①教師の呼びかけに対して、拍の流れやフレーズを適切に感じ取って応えている。（歌唱） ②もの売りの声の拍の流れやフレーズを感じ取って声を合わせて表現を工夫している。（歌唱） ③「テン」「ドン」「ドコ」「チャン」「チキ」などの音の特徴を生かした表現を工夫している。（創作）	①教師の呼びかけに対して、拍の流れやフレーズに気を付けて応えている。（歌唱） ②もの売りの声の拍の流れやフレーズに気を付けて声を合わせて表現している。（歌唱）	①唱歌と演奏された音楽が合っているか、注意して聴いている。（鑑賞）

7 授業の全体計画、そして評価の計画と方法は？

授業の全体像は以下の通りです。評価規準と評価方法を位置付けます。

時	ねらい・学習活動	具体の評価規準	評価のポイント	評価方法
1	【ボールでおはなし1】 ・名前を呼んでボールを投げる教師に対してボールを投げ返しながら声で答える。 【うたってあそぼう】 ・わらべうたによる身体表現や歌遊びを楽しむ。 【いろんな声をたのしもう】 ・「ちゃっくりがきいふ」のお話を聞いて、ことばの表現を楽しむ。	アー① イー① アー②	→教師の投げかけたボールを積極的に返す。 →双方の距離やスピードの変化に応じた応答をしようとしている。 →絵本を見つめたり、お話に反応したりしている。 →ポイントとなる表現を口ずさんだりして反応している。	表情や身体の動きを観察 一人一人の反応と周囲の児童への問いかけにより達成状況を把握 表情や反応を観察 口ずさみなどの反応を観察

- ・ボールによる応答やわらべうた遊びに興味を持ち、楽しく参加する。
- ・おはなしに出てくるもの売りのことばの拍感、フレーズ感、音色の変化のおもしろさを体験する。

(2) 展 開

学習内容【教材】	教師の働きかけ	児童の活動	評価規準【評価方法】等
ボールでおはなし1			アー① ・ボールの応答やわらべうたによる遊びを楽しんでいる。 【表情や身体の動きを観察】 イー① ・教師の呼びかけに対して、拍の流れやフレーズに気を付けて応えている。 【一人一人の反応と周囲の児童への問いかけにより達成状況を把握】
○呼びかけ（教師）と応答（児童） ・教師の呼びかけに対してフレーズや拍感を合わせて応える。 【「○○さん」「はあい」「オーイ」「なあに」などの呼びかけと応答】	○氏名等を用い、呼びかけながら児童にボールを投げかけ、児童の応えをボールとともに受け止める。 ・最初は、「○○さん」「はあい」から始め、しだいに呼びかける内容を変化させる。 ・応答のことばの拍の流れやフレーズが呼びかけと合うように指導する。	○教師から問われた内容に対して、ボールを投げ返しながら応える。 ・ボールを受けとりやすい位置に座る。 ・いろいろな呼びかけに対して、適切なことばで応える。 ・教師の投げかけるボールのスピードを感じて、それに合わせた応えをする。	
うたってあそぼう			アー② ・お話に関心をもち、楽しみながらもの売りや唱歌（しょうが）などの表現をしようとしている。 【絵本を見る表情やお話に対する反応を観察】 【もの売りの演奏表現の聴取】
○わらべうたによる身体表現や遊び ・ことばの持つ拍感、フレーズ感、音色のおもしろさを感じ取る。 【・せっせっせのキューピーさん・たけのこめだした・茶茶つぽ・手つないで・さよなら三角 など】	○わらべうたによる遊びに誘う。 ・前回訪問時に教えた、「茶々つぽ」を確認する。 ・「せっせっせのキューピーさん」を教師が児童から教えてもらうようにする。 ・身体の動きや歌い方にも気を付けて歌わせる。・先生とのじゃんけん勝負とし、楽しくできるように、留意する。 ・「手つないで」を教える。	○わらべうたによる身体表現や遊びをする。 ・手遊びの「茶々つぽ」のできぐあいを示す。 ・好きな歌や教えてあげたい歌を歌って遊ぶ。 ・全員で「せっせっせのキューピーさん」を声を合わせて歌う。 ・「手つないで」を教わり、行きたい場所を入れて遊ぶ。	
いろんな声をたのしもう			アー② ・お話に関心をもち、楽しみながらもの売りや唱歌（しょうが）などの表現をしようとしている。 【絵本を見る表情やお話に対する反応を観察】 【もの売りの演奏表現の聴取】
○もの売りなどの様々な声の表現 ・「ちゃっくりがきいふ」のお話を聞いて、ことばの持つ拍感、フレーズ感、音色の楽しさを体験する。 【おはなし「ちゃっくりがきいふ」、「さよならさんかく」】	○絵本の「ちゃっくりがきいふ」を読んで聞かせる。 ・「ちゃっくりがきいふ」「ぱびぶぺぽ」、金魚売り、とうふ売り、チンドン屋の呼び声の表現の拍感、フレーズ感、音色に注して読む。 ・お話中の「パッピプッペポ」の場面から児童を参加させるようにし、一緒に呼び声を表現させる。 ・「ちゃっくがきいふ」「パッピプッペポ」、さらにチンドン屋の「チャンキチーン ドドーン」を分担して声に出させる。	○教師の読むおはなし「ちゃっくりがきいふ」を聞き、呼び声を表現する。 ・おはなしを聞く。 ・教師の指示に従って、「ちゃっくがきいふ」「パッピプッペポ」、さらにチンドン屋の「チャンキチーン ドドーン」といった呼び声のそれぞれを声で表現してみる。 ・最後の部分は、グループごとにそれぞれもの売り、チンドン屋の役割を決めて、にぎやかに表現をする。	

2) 2 時間目の学習

(1) ねらい

- ・ボールによる応答において、拍の流れやフレーズを適切な形で表現する。
- ・もの売りの声の拍の流れやフレーズの特徴を感じ取って表現を工夫する。

(2) 展 開

学習内容【教材】	教師の働きかけ	児童の活動	評価規準【評価方法】等
ボールでおはなし 2			ウー① ・教師の呼びかけに対して、拍の流れやフレーズに気を付けて応えている。 【応答の歌い方を判断、また、周辺児童への問いかけによる確認】
○呼びかけ（教師）と応答（児童） ・教師の呼びかけに対してフレーズや拍感を合わせて応える。 【「げんき」「げんきですよ」「あそぼ」「いいよ」などの会話も加えた呼びかけと応答】	○氏名や簡単な会話表現を用い、呼びかけながら児童にボールを投げかけ、児童の応えをボールとともに受け止める。 ・前時の氏名中心の呼びかけだけでなく、短い会話も挿入する。 ・児童の応答の様子を観察したり、周囲の児童に問いただしたりしながら、適切な反応ができるように配慮する。	○教師から問われた内容に対して、ボールを投げ返しながら応える。 ・問いに対して自分なりの返事の内容を考えて応える。 ・ボールが弧を描いて戻る中に会話をうまくはめ込んでいく。 ・対象となった友達の応え方をよく見聞きして良い状態を判断できるようになる。	
うたってあそぼう			
○わらべうたによる身体表現や遊び ・ことばの持つ拍感、フレーズ感、音色のおもしろさを感じ取る。 【・茶々つぼ・さよならあんころもち】	○わらべうたによる遊びに誘う。 ・「茶々つぼ」を前時よりも速い速度で行う。 ・できたのを確認しながら、少しずつ速く行う。	○わらべうたによる身体表現や遊びをする。 ・「茶々つぼ」は最初、「ふたがない」で止め、手の場所を確認しながら遊ぶ。	イー② ・もの売りの声の拍の流れやフレーズを感じ取って声を合わせて表現を工夫している。 【それぞれの特徴をつかんで表現しようとしているか、練習の様子を聴取】 ウー② ・もの売りの声の拍の流れやフレーズに気を付けて声を合わせて表現している。 【評価をしながらグループの売り物を購入。演奏による聴取】
もの売りさんになってみよう			
○もの売りの声の表現 ・もの売りの声を、拍感、フレーズ感、を感じ取って表現する。 【おはなしにでてきた「きんぎょ」「とうふ」の他に、「なっとう」「いしやきいも」「たけや竿だけ」「エーところてん」「おせんにキャラメル」「あまーいあまざけ」などの売り声】	○もの売りになったつもりで、売り声の表現をさせる。 ・前時のおはなしを発展させ、いろいろなもの売りの声を紹介する。 ・それぞれの特徴が出るように歌い、練習させる。 ・二人一組のグループをつくり呼吸を合わせて表現を工夫させる。 ・グループの表現に対して、アドバイスをを行う。 ・児童をもの売り及び品物に見立て、うり声をださせ、声が合っていることを評価しながら買い物をしていく。 ・購入された児童は、教師の後ろに列にさせる。	○もの売りになって、買い手がつくような声の表現を工夫する。 ・おはなしに出できたものの他に「なっとう」「いしやきいも」などのうり声を聞き、真似る。 ・二人で声をそろえて、練習する。 ・教師の声を真似て、うり声の特徴が出るように工夫をする。 ・買い物をする教師にたいして、売り声をそろえて発する。 ・教師が近くに来たら声を揃えて売り声をあげる。 ・買われたグループから教師の後ろに列となり、仲間の売り声に耳を澄ます。	

3) 3時間目の学習

(1) ねらい

- ・唱歌の表現と演奏された音楽との共通点に気を付けて聴く。
- ・唱歌の音の特徴を生かして、簡単な唱歌を作る。

学習内容【教材】	教師の働きかけ	児童の活動	評価規準【評価方法】等
うたってあそぼう			
○わらべうたによる身体表現や遊び ・ことばの持つ拍感、フレーズ感、音色のおもしろさを感じ取る。 【既習曲のうちから選択】	○児童とともにわらべうたによる遊びをする。 ・既習のわらべうたのうちから、1，2 選択させる。 ・声をそろえて歌うように注意を向ける。	○わらべうたによる身体表現や遊びをする。 ・これまで習った曲から選択し、声と身体をそろえて遊ぶ。	
楽器とおはなし			
○唱歌を活用した言葉の組合せ ・唱歌の音節を組合せ、拍、フレーズ、音色がまとまった新たな唱歌を作る。 【おはなしにできた唱歌「チャンチキチーン ドドン」など、楽器としては、鉦、太太鼓】	○唱歌による表現を感じ取らせ、音色やリズムを組み合わせ新唱歌を作らせる。 ・「チャンチキ」「ドドン」といったおはなしの中の唱歌の用法を発展させ、児童に新たな唱歌を発想させる。 ・「チャン」と「チキ」と「チーン」、「ドン」「ドドン」「ドコ」などの違いを楽器演奏により把握させる。 ・楽器の演奏から、奏されている唱歌を聴き取らせる。 ・唱歌創作する事例を具体的に紹介する。 ・二人一組のグループをつくり、それぞれ楽器を選択させ、唱歌によりリズムを作らせる。 ・鉦、太鼓の二組のグループを組合せ、それぞれの唱歌をつなげて一つにさせる。 ・いろんな村の祭囃子を想定して発表させる。 ・児童の作った唱歌を唱えて確認し、実際に楽器で表現させる。	○唱歌の音節を組合せ、自分の唱歌を創作する。 ・発音と音色、ことばのフレーズとリズムフレーズとが直結して作られていることを、教師の演奏例から聴き取る。 ・教師の演奏から、奏法の違いを理解する。 ・自分でも口ずさんで、聞こえる音楽との一体感を味わう。 ・唱歌と演奏との対応関係を聴き取る。 ・楽器の演奏を聞いて、唱歌として唱える。 ・何度も口で繰り返して唱え、自分のグループの唱歌を覚える。 ・他の異なった楽器のグループと一緒に、唱歌を組み合わせて練習する。 ・グループごとにできた唱歌を発表する。 ・発表した唱歌に対応する先生の演奏を聞く。 ・できあがった唱歌と、先生の演奏との対応関係に注意して聴く。	エー① ・唱歌と演奏された音楽が合っているか、注意して聴いている。 【唱歌を唱えさせることにより確認】 イー③ ・「テン」「ドン」「ドコ」「チャン」「チキ」などの音の特徴を生かした表現を工夫している。 【取り組みの様子の観察や唱歌の発表の聴取】
おなかにいるのはどんな小鳥さん？			アー② ・お話に関心をもち、楽しみながらもの売りや唱歌などの表現をしようとしている。 【児童の様子の観察、鳴き声の発表により確認】
○ことばの拍、フレーズ、音色を意識した表現（学習のまとめ） ・おはなしに出てきた親の小鳥の鳴き声を生かし、ことばの拍、フレーズ、音色を考えて子どもの小鳥の声を表現する。 【おはなし「いのいのどんとこっとりさん」に登場する鳴き声】	○おはなし「いのいのどんとこっとりさん」を読み、子どもの小鳥の表現をさせる。 ・題材のまとめとして、ことばの持つ音楽的側面に注意を向けさせる。 ・読んだ後、それぞれのおなかに注目させて、浮かんでくる言葉を何度も繰り返させる。 ・数人に発表させる。	○おはなしの続きのつもりで、小鳥の鳴き声をまとめた形で表現する。 ・「ピープー ごんげんだ」に続く表現を口ずさむ。 ・何度も繰り返して暗唱する。 ・数人の友達の発表を聞いて、自分の鳴き声をより良いものにしていく。 ・発表して聞き合う。	

おわりに

日本の音楽教育は、西洋と日本という並列的な思考の中で存在してきた。明治以来、西洋の枠組みを取り込み、その文化を受容し、消化、吸収する中で、今や西洋音楽をまるで自文化のように感じている現実がある一方で、日本語を話し、日本の風土の中で生活し、そこから生まれた感性を基盤としながら独自の文化を育んできた歴史が厳然と存在する。

これまでの学校の音楽教育は西洋音楽を主体としたものであり、日本の伝統性に根ざした音楽は常に日陰の存在であった。それ故に昨今、こうした状況が見直され、「日本」に目を向けた音楽の学習が主張されている。しかしながら、これは単に教材の数や扱われる比率の問題ではないと考える。例えば、「日本」の教材の比率を全体の8割にすればよいのであろうか。

筆者が重要に思うのは、日本における西洋と日本の関係を、並列、対立、あるいは共存といったようにとらえるのではなく、むしろ両者融合の時代に日本人が生きているという認識であり、そこから必然的に生ずるであろう、音楽科教育のパラダイム変換なのである。

日本語を話して、日本の風土の中で居ながら、世界中の様々な音楽を吸収し生活しているといった事実、文化は刻々と変容し生成され続けているという認識である。そうした中で、まず基盤となる音楽性、核となる感性を生み出すものは何かと考えた時、そこに浮かびあがってきたものが日本語であった。自らの根っ子の部分を十分に咀嚼理解し、多様な文化を学びながら新たな自文化を豊かに創造していく真のエネルギーは、この根っ子を耕すことから始まると信じている。今日の提案は、そのためのささやかな実践である。

末筆ながら、附属長岡小学校の諸先生、とりわけ音楽科の伊藤純子先生、そして何よりも1年1組の子どもたちに心より感謝申し上げる。

◎資料

紙芝居 いのいのどんとこっとりさん

もとのお話 小杉 喜恵
文・構成 伊野 義博

あるところに、いのいのどんというお百姓さんがいました。

よく晴れた春の日のことです。

「それじゃあおっかさん。いって来るよ。」

いのいのどんは、おかあさんのつくってくれたおむすびを持って、今日も山の畑にでかけていきました。

畑に着くと、さっそく仕事にかかります。

さて、一生懸命畑をたがやしていたいのいのどん。ふと空を見上げると、もうお日様が頭の上たか？く登っています。

「ああ、もうお昼か。そろそろお弁当にしよう。」

パクパアクパク パクパクパクパクパックリコン

草の上に腰をおろしたいいのいのどん。たちまちおにぎりをたべてしまいました。

「アーワワワワ なんだか眠くなってきたなあ。」

おなかがいっぱいになったのと、ぼかぼかのお日様のせいで、いのいのどんはその場にごろり・そしてたちまち大いびき。

ごわ~~~~。ホヒョヒョヒョヒョヒョヒョ。

ごわ~~~~。ホヒョヒョヒョヒョヒョヒョ。

そこへ、一羽のこっとりさんがやってきて、近くの木の子にちゃんと止まりました。

いのいのどん、口のまわりに、ごはんつぶをたくさんつけています。こっとりさんはそれをみつけたのです。



こっとりさんはすーっとほっぺに止まると夢中になってこはんつぶを食べました。そしてあとひとつぶになったとき、いのいのどんのいびきがいちだんと大きくなりました。

ごわ~~~~。ホヒョヒョヒョヒョヒョヒョ。

そのとたん、こっとりさんは、いのいのどんの口の中にヒューッとすいこまれてしまいました。

「ア～あ、よくねたなあ。」

「なんだか、おへそのあたりがくすぐったいぞ。」

いのいのどんはびーっくり。

何とおへその穴から、こっとりさんの羽がピョン。

「ややややや、これはなんだ？」

おどろきたいいのどん。その羽を引っ張ってみると、

びーぶうーごんげんだ もってえまればスッポロピンのパチリンピー

もいちど引っ張ると、

びーぶうーごんげんだ もってえまればスッポロピンのパチリンピー

「こりあおもしろい。」

いのいのどんは、また羽を引っ張りました。すると、

びーぶうーごんげんだ もってえまればスッポロピンのパチリンピー

「もういっちょう。」

びーぶうーごんげんだ もってえまればスッポロピンのパチリンピー

「不思議不思議、みんなににも聞かせてあげよう。」

こうなったら仕事どころではありません。畑に鰯をほっぼろかして、山を下って村の人たちを集め、おへそを出しては羽を引っ張ります。

びーぶうーごんげんだ もってえまればスッポロピンのパチリンピー

「あっはは。」「おっほほ。」「なんて面白い。」

村の人たちも大喜び。おかあさんも大喜び。いのいのどんもだ？いまんぞく。

「おっかさん。今日は、佳い日だったね。」

「あ？あ、わしゃくたびれた。おやすみ」

いのいのどん、ふとんの上にボタンキュー。

夜です。

いのいのどんは、不思議な夢を見ました。

お腹の中で、こっとりさんがたくさんたくさん卵を産んだのです。そして何と、その卵が次から次へとかえったかと思うと、いのいのどんの口からどンドン飛び出していきました。

子どものこっとりさんのかわいい声が、賑やかです。

びいーぶうーごんげんだ スッポロスッポロスッポロリン

びいーぶうーごんげんだ プープープープープー――

びいーぶうーピップップ プップップップッパピペペー

子どものこっとりさんたち、小さな羽をばたばたさせて、眠っている日本中の子どもたちのもとへ飛んでいきました。そして、みんなの口からお腹の中へヒュー――。

さあて、みなさん。なんだかお腹がむずむずしませんか？

トッピンカラリノ プッ

注

- ¹ 藤田美美子「日本の子どもたちの音楽性とその育ちに関する民族誌学的研究」『音楽研究 国立音楽大学大学院研究年報第十輯』1998年, pp. 43-72
- ² 星旭「唱歌」『新訂 標準音楽辞典』音楽之友社, 1991年, p. 883
- ³ 佐藤峰雄氏は、瞽女唄の三味線の合いの手を詳細に分析し、「個々の「合いの手」は、おもに1拍を単位に、自由に拍を変えることによって、「間」を動かし、その中で旋律の音をリズム的に変化させることによって、音楽的な意味を表出し、「語り」の内容にそった旋律に変奏しながら演奏される。」ことを明らかにしています。(佐藤峰雄「高田瞽女歌＜俊徳丸＞(段物)に見られる三味線の「合いの手」について」『民俗音楽研究第26号』日本民俗音楽学会, 2001年, pp. 27-40)。この研究は、三味線の合いの手についてのものであり、本発表が焦点を当てている「うた」とは異なりますが、拍を単位としたリズムや旋律の変奏について示唆を与えてくれます。
- ⁴ 町田佳聲「民謡源流考」『日本の民謡と民俗芸能』東洋音楽学会, 1967年, p. 48
- ⁵ 柿木吾郎「刈干切唄の比較分析」『日本の音階』東洋音楽学会, 1982年, p. 119
- ⁶ 伊野義博「音楽が生み出される場とこどものかかわり」『日本音楽を学校で教えるということ』日本学校音楽教育実践学会編, 音楽之友社, 2001年, pp. 50-56
- ⁷ 藤田美美子「話す行為に見られる音楽的側面」『国立音楽大学研究紀要第21集』1987年 pp. 113-122
- ⁸ これらの多くは、附属長岡小学校の伊藤純子先生により、あらかじめ子どもたちに伝えられていました。感謝いたします。
- ⁹ この歌(さよならあんころもち?)は、次の文献から情報を得ました。近藤信子編『みんなであそぶ わらべうた』福音館書店, 2002年
- ¹⁰ 文・桂文我, 絵・飯野和好「おべんとすいと」『ごくらくらくご』小学館, 2002年, pp.13-22
- ¹¹ 文・桂文我, 絵・梶山俊夫『ちゃっく리가きいふ ーらくご絵本ー』福音館書店, 2002年
- ¹² このお話は例えば、次の文献でも見ることができます。ただし、内容は全く同じではありません。水沢謙一著「チャックリガキ」『おばばの昔ばなしー池田チセ(75才)の語る百五十四話ー』1972年(初版1966年) pp. 298-299
- ¹³ 水沢謙一著「ネズミ経」『ふるさとの夜語りー長岡・東山の昔話集ー』1972年, pp. 172-174
- ¹⁴ 清水和氏の授業「ボールであいさつ」を参考にしました。『音楽之友社ミュージック・ライブラリー 音楽をつくろう あそび・動き・即興から 低学年』監修: 楠瀬敏則, VHS ビデオ858310, 音楽之友社, 1991年
- ¹⁵ この2曲は、矢部キヨ氏を中心とした村上弁の会(新潟県村上市)の方々から教わりました(2001年)。県内には、たくさんのわらべ歌があります。素晴らしい教材の宝庫です。

¹⁶ 一般的には、このような形のものは学習指導案となっていますが、本稿では研究と学習指導を結ぶ一連の作業の中で、授業をどのように構成していくかという実践的な方法論を示していますので、このような名前にいたしました。

¹⁷ これまでの具体的な提案としては、次のような例があります。

- ・伊野義博「教科書といっしょにすすめる日本音楽学習の実践的な年間計画（試案）」『音楽科教育の実践学』伊野義博，森下修次，田中幸治，鈴木賢太，松浦良治，清水研作，横坂康彦著，三恵社，2003年
- ・伊野義博「「越天楽今様」新たな視点によるアプローチ～小学校6年生における授業の構成～」新潟大学教育人間科学部紀要 第5巻第2号，2003年，pp. 135～172